
【今は昔】転生！かぐや姫【竹取の翁ありけり】

Tomo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【今は昔】転生！かぐや姫【竹取の翁ありけり】

【Nコード】

N8876X

【作者名】

Tom o

【あらすじ】

“目を開けた俺の視界に最初に飛び込んできたのは、斧を構えて俺を見下ろす、身長30メートルはあろうかという超巨人の爺だった。”

試験勉強をしていたはずの俺が目覚めたのは、平安時代の平安京で、俺は光り輝く超絶美少女になっていた。しかも男装すると超絶美少年で、しかも無敵の身体能力に加えて魔法まで使える。俺が転生したのは、竹取物語の主人公、かぐや姫だった。

俺を面白半分で転生させた神をとっ捕まえて元の世界に戻させようとするが、京中の男どもから求婚されて大騒ぎに。人目を忍んで男装して搜索をしていると、今度は女どもからも追い回されて逃げ場がない。どうする、俺！？

主人公最強系異世界転生モノで、美少女、美少年、美女、美青年、ハーレム、逆ハーなんでもあります。ついでに陰陽術だか魔法だかなんだか分からないものも出てきます。衣装は平安時代の装束が中心で、男性は狩衣、女性は袷が基本です。バトル要素は薄いですが少しは入る予定です。恋愛要素については、まともな恋愛が成立する気はしませんが、求婚されたり手ひどく振ったりはします。

一応、全年齢対象です。想定読者としては、12歳以上のつもりで書いています。

壱・爺と婆

（んっ。どうやら寝ていたみたいだ）

目を開けた俺の視界に最初に飛び込んできたのは、斧を構えて俺を見下ろす、身長30メートルはあろうかという超巨人の爺じいだった。

（うわー。こっ、殺されるー！）

俺は逃げ場がないかと左右を見ようとしたが、どうしたことが体が動かない。なんとか目だけで周囲を確認してみると、全身を布でくるまれて、風呂桶のようなものの中に入れられているようだった。

（なんなんだ、ここは。どうなってんだ）

爺は手のひらだけで優に2メートルはある手をこちらに手を伸ばしてきた。あの手に捕まったら、そのまま握りつぶされて、それで終わりだ。でも、逃げたくても体が動かない。爺は興奮した様子で、意味のわからないことを叫んでいる。

（やばい。死ぬ）

思えば短い人生だった。高校受験を耐え抜いて、何とか希望の進学校に入学して2年目の春を迎え、中間試験の勉強を部屋でしていたところまでは覚えてる。

そうだ。部屋で古典の勉強をしていたはずなんだ。それがどうしていきなり命の危機なんだ！

（ああ、もうだめだ）

そう思った時、爺は俺を手のひらに優しく乗せて、どこかに運んで行った。

俺が連れて行かれた先は爺の自宅のようだった。巨人の家にふさわしい巨大な家で、爺の妻らしい巨人の婆ははあがいた。婆は俺を見るとやはり理解できない言葉を叫んで、顔を覗き込んでニヤツと笑って奥の部屋へ足早に歩いていった。

（今度こそ取って喰われる）

俺は、包丁を研いだ婆がいつ襲いかかってくるかと肝を冷やしていたが、爺に運ばれて奥の部屋に行くと、婆は包丁を研いでいたのではなく、布団を布いていた。俺はそこに寝かされると、急激に睡魔が襲ってきて意識を失った。

壱・爺と婆（後書き）

転生！かぐや姫をお読み頂いてありがとうございます。この話は竹取物語をベースにしている、男子高校生が平安時代に転生してかぐや姫になってしまうことで起きるドタバタを描いたコメディです。

異世界転生モノで主人公最強なコメディを書いてみようと思ってストーリーを考えていたときに、竹取物語をかぐや姫視点で見るとこのシチュエーションにぴったり当てはまることに気づきました。そこで竹取物語からストーリーと設定の骨子をもらって、ラノベっぽく（？）書き直してみたのがこれです。

それなりに時代考証して書いてますが、都合よく無視しているところもあります。例えば、成人男女がお齒黒をする風習とかは、絵面的にあれなので却下しています。

この小説は実験的に書いている小説なので、想定よりも人気が出ない場合や、その他事情がある場合は、途中で連載を中断することがあります。あしからずご了承ください。

括弧の使い分けは、（ ）が心の声で、「 」が古語の発話、『 』が現代語の発話です。括弧は必ず改行されていて、冒頭に発話者の名前を付けています。発話者の名前がないときは、前後の文脈で指定しています。ただし、心の声は、特に発話者が書かれている時をのぞき、すべて“俺”の言葉です。

例）

俺「おはよう」

爺「おはよう」

式・可愛いは罪

どうやら俺が間違っていたようだ。まず、爺と婆が巨人なのではなく、俺がちびだったということらしい。でなければ、ハエがそんなに巨大なはずがない。推測するに、俺の身長は10センチメートルもないくらいだ。

次に、爺と婆は俺を食料とは見なしていないらしい。育ててから食うという可能性は否定できないが、今のところ甲斐甲斐しく世話をしてもらっている。

第三に、俺はどうやら赤ん坊だ。体がうまく動かせないのはそのせいだ。しかし、それだけではなく、どうやら俺は恐ろしい速度で成長している。事実、俺は数日の内に立って歩けるようになった。

第四に、俺はどうやら女だ。

（これは夢だ。夢に違いない）

爺に合う前の俺の最後の記憶は、自分の部屋で机に向かって古典の勉強をしていたところだ。読んでいたのは竹取物語。おそらく、俺は古典文学の持つ催眠効果によって、非自発的に眠らされたのに違いない。であれば、そのうち起きるはずだ。それまでゆっくり待とう。

爺は、俺と会ってから随分羽振りがよくなったようだ。少しずつ分かるようになってきた言葉を、断片的につないで推測するに、どうやら爺が竹林に入って竹を切ることに、竹の中から金銀財宝が現れるらしい。新しく建てた鞍の中には、そうやって得た金銀財宝が

うなるように収められているということだ。

俺が爺に拾われてから、約1ヶ月の時間が過ぎた。俺は身長が推定120センチメートル程度まで伸び、日常会話にも不自由しなくなり、文字の読み書きも多少はできるようになってきた。現代日本ならちょうど小学校に入学するくらいだろう。そんな時、俺は爺に呼び出された。

爺「竹姫。あなたに話があります」

俺「何ですか、おじいさま？」

竹姫というのは俺の名前だ。爺はよほど竹が好きらしい。俺の話し方が心の声と随分違うのは、俺がいままでこういう話し方しか習って来なかったからだ。不意だが仕方ない。

爺「実は、あなたを見つけた時、一緒にこのような箱が入っていたのです。中には手紙が入っていたのですが、異国の字で描かれているため読めませんでした。これはあなたのものなので、あなたにお渡ししておきます」

箱は、白い木箱で、木の種類は分からないものの、非常に美しい継ぎ目のない箱だった。

俺「おじいさま、開けてもよろしいですか？」

爺「その箱はあなたのものです。自由にしなさい」

俺は優雅な手つきで（これもこちらに来てからの教育の賜物だ）箱を開けて、中の手紙を開いた。そして、驚いた。

（これは、現代日本語じゃねーか）

言葉が分かるようになって、初めて分かったことだが、俺がいるこの場所は、どうやら平安時代の平安京のようだ。俺が話すのは当然古語で、書くのも読むのも現代日本語とは似ても似つかないミミズのノタクリだ。

（現代日本語ってことは、この箱を残した野郎はこの時代の人間じゃねーな）

そんなことを考えながら、顔だけはにこやかに最上級の笑顔を作って、爺に向かって言った。

俺「ありがとうございます、おじいさまっ！ この箱は、竹姫の一生の宝ものにします」

爺はこの世のすべての幸せが一度に訪れたような恍惚とした表情をして、そのまま全身に電撃が走ったように体が硬直して、口から魂のようなものが出てきた。

（やばい。可愛いオーラを使いすぎた。このままでは爺が死ぬ）

俺はとっさの判断で手を伸ばし、口から出てくる魂を捕まえて、口の中に押し返した。

（あぶねー。危うく人を一人殺すところだった。可愛すぎるのも考えものだな）

そう。何を隠そう、俺は可愛いのだ。これは客観的な事実だ。なぜなら俺はまだ自分の顔をはっきりとは見ていない。この世界には現代のような機能的な鏡はないのだ。だから、自分が可愛いかどうか

かは偏に周囲の人間観察によるものだ。正確には、人間および動物だが。

俺が可愛いオーラを全開にして笑顔を作ると、それを見たものは、老若男女、人間動物を問わず、あらゆる生き物が幸せの表情を浮かべたまま悶絶する。心の弱いものは、そのまま二度と目覚めない。

初めのうちはそれが分からず、何人かは残念なことになってしまった。ただ、やつらはそろって、生きているときには見せたことのないような幸福の表情を浮かべていたので、遺族からは逆に感謝をされたのだが。

なんにせよ、俺はもう少し笑顔を作るときは気をつけたほうがいい。死なない程度に可愛いオーラを抑えることができれば、周囲の人を安全にこの世の天国に招待できるのだが、一歩間違えると本物の天国に行ってしまう危険がある。可愛い花には致死毒があるのだ。

式・可愛いは罪（後書き）

竹姫は幼名です。まだ子どもなので、正式な名前がついていません。

かぐや姫は3ヶ月で成人するので、正確な年齢は不明（定義通りには0歳）ですが、1ヶ月の時点で換算小学1年生程度で身長120センチメートルくらいということにしてみました。まあ、日に日に身長が伸びていくので、正確な値を決めても意味ないですが。

近い内にかぐや姫は成人してしまうのですが、成人したら身長はいくつくらいがいいでしょうね。年齢は3ヶ月後に20歳相当になってそこで打ち止めのつもりです。3ヶ月で成人するかぐや姫に年齢は無意味ですが、一応、現代に換算しても成人しているほうが、いろいろ無難だとは思うので。

ところで、竹取物語の舞台は奈良時代と想定されているのですが、本作では平安時代に変更しています。平行して平家物語を書いていて、時代考証がしやすかったのも、ちなみに、竹取物語が書かれた時期は平安時代だそうです。

参・式神と俺

爺と別れた後、俺は自室に戻って、もう一度例の箱を開けてみた。箱の中には手紙の他に、人型に切られた紙と、狩衣かりぎぬ、指貫さしぬき、立烏帽たてえ子こ、足袋たび、足駄あしたと、男性の普段着一式の形に切られた紙が入っていた。

まず、手紙を取り出して読んだ。そこには次のように書いてあった。

『これを読んだら、人目を忍んで上賀茂神社まで一人で来ること。人型の紙は姫ちゃんの身代わりに、その他の紙は姫ちゃんの変装に使ってね（＾・＾）v』

（…姫ちゃんって誰だよ）

手紙の2枚目には、今の屋敷から上賀茂神社までの手書きの地図が書いてあった。なんか、頼りない地図だが…。

（じゃあ、今夜、行ってみるか）

人目を忍ぶってことは、昼より夜のほうがいいだろう。幸い今日は満月だ。月明かりで夜でもなんとかなるだろう。ダメそうならさっさと帰って、日を改めて出直せばいい。

（後は残りの紙切れか。身代わりについて言っても、これをどうすれば身代わりになるんだ）

俺は人型に切られた紙を箱から取り出した。すると、その紙は光

を伴って消え、代わりに目の前に光と共に人が現れた。

（なっ、なっ、なっ）

俺は思わず大声を出しそうになったが、慌てて手で口を押さえて、すんでのところで堪えた。

落ち着け。俺は花も恥じらう男子高校生だ。例え突然目の前に人が現れても、大騒ぎするなんてみつともない。それが、推定小学1年生の裸の女の子でもだ。

女の子『よう、俺』

健全な男子高校生は、小学校1年生の女の子を見ても、可愛いなとは思わない。それ以上はない。しかし、この子は本当に可愛いな。まるでこの世のものとは思えないほどに…

女の子『あッ。そんなに見つめちゃ恥ずかしい…』

俺『きッ、気色悪い声を出すな！』

裸の女の子が出した声に我に返った俺は、思わず叫んでいた。そしてその後、後悔した。今の叫び声で爺や婆や他の使用人たちが来るかもしれない。そうなったら、この状況をなんて説明する？

俺は女の子の口を抑えて耳を済ませたが、幸い誰も気づかなかつたようで、近づいてくる足音はしなかった。この屋敷は伝統的な日本家屋で、廊下を歩けば音がするのですぐに分かる。

女の子『あッ。そんなッ。激しい、ン…』

俺『いい加減にしろよ！ お前は一体誰なんだ！』

いつまでも変な声を出している女の子に、俺は当然あるべき疑問をぶつけた。

女の子『俺だよ！ 俺』

俺『だから誰だよ！』

女の子『だから俺だよ』

俺『俺ってなんだよ。オレオレ詐欺か、お前は』

女の子『お前が呼び出したんじゃないか。お前そっくりの姿形をした、お前の身代わりの式神だよ』

なんだと？ これは俺だと？ 確かに身長も年齢もほとんど同じだ。顔は、いままできちんと自分の顔を見たことがなかったが、洗面の時に水面に映る俺の顔は確かにこんな輪郭だったかもしれない。

（しかし、なんて可愛いんだ）

俺はもう一度目の前にいるもう一人の俺を見た。それは到底人間とは思えないほどに可愛い女の子だった。五感を越えて心まで揺り動かされるような、そんな魅力があった。この子が大人になったら、世界中の男も女もすべてを虜にするような絶世の美女になるんじゃないだろうか？

式神（『女の子』）『あー、もしもし。ナルシズムに耽るのはいいんだが、とりあえず服を着させてくれ』

参・式神と俺（後書き）

当面の間は、週2回投稿のペースで進めていきたいと思っています。

ところで、烏帽子は成人男性の服装ですが、長い髪を隠すためにわざと衣装として用意しています。

肆・男装女子

俺は、箱に入っていた男性物の衣類一式をかたどった紙を取り出した。これらもまた、光を伴って消え、光と共に本物の衣類となって現れた。

俺『とりあえず、これを着て、息を潜めといてくれ。家の人に見つかるやばい』

式神『えー、可愛いのがいいのに』

式神はぶつくさ言いながら、狩衣に指貫袴を身に付けた。それを見た俺は、信じられないものを見た気持ちで、視線が釘付けになった。

（何という美少年）

美少女から美少年への変装は、あまりにも自然でかつ突然だった。美しさは性別を越えるとしか表現しようのない、完璧な美少年がそこに出現した。

式神『姫。そのように熱い視線を注がれては、私も男としてそれに答えないわけには参りません』

そう言いながら、茫然としている俺の唇に、式神がその美しい美少年の唇を重ねようとした。

俺『なっ、ちょっ、おまっ、おっ、おれっ、なっ、おっ、おまっ、おれっ』

俺は、驚きのあまり、何を言っているのか自分でもよく分からないまま、式神を突き飛ばした。なんというクソ変態式神だ、こいつは。

俺『お前は、俺で、しかも女の子だろうが！ 何をやってるんだ！』

式神『シー。声大きいよ。誰か来ちゃうかも』
俺『ッ！』

その時、向こうから廊下を足早に歩いて来る足音がした。

「竹姫さま。どうなされましたか？」

ふすまの影から現れたのは、侍女の雪^{ゆき}だった。裕福になった爺が俺のために雇った住み込みの世話係で、雪のように白い肌を持つところから、俺が雪という名前を与えたのだ。

ちなみに、この時代はまだガラス戸はおろか障子すらも発明されていない。格子戸という、細かい格子状の穴の開けて目隠しと採光を両立させようとしている戸もあるが、障子に比べると暗い。なので、基本的には部屋は戸であまり区切らず開放的になっていて、必要に応じてふすまや御簾^{みす}や屏風で目隠しをする。俺の部屋の場合、普段は庭に面した側は採光のために開けていて、廊下や他の部屋からは部屋の中は見えないようにしていた。

俺「なんでもないのよ、雪。庭に綺麗な花が咲いているから、和歌でもと考えていたんだけど、うまく考えがまとまらなくて」

俺は、とつさに庭に咲いているあじさいを見て、適当な嘘をでっち上げた。式神は反対側の奥のふすまの影に隠れている。とりあえ

ず、雪をこの部屋から出さない。

雪「まあ、それは素晴らしいですね。あの花はあじさいという花でございますの。梅雨の季節に咲く花で、この花が咲き始めると、雨の季節がやってきますわ」

俺「まあ、あじさいというのですね。綺麗な名前ですね。近くに寄って見てもよろしいかしら？」

俺はそういうと、雪を庭に連れ出した。これでなんとかごまかして、そのまま帰ってもらおう。なんなら和歌の一つも詠んでみれば、満足してくれるはずだ。

肆・男装女子（後書き）

和歌は当時の基本教養の上に、ポピュラーな娯楽でもありますので、7歳くらいだと子供らは和歌の真似事をして遊ぶのかなあと思います。

ところで、障子の誕生と普及は平安時代末期の平清盛が活躍した頃まで待たないといけないのです。平安時代は間仕切りの発達とそれに伴う室内空間の使い方が大きく変わっていった時代ですが、この話の舞台設定は平安中期で、障子はまだ誕生していないけれども、ふすまの普及でプライベートな個室という概念が徐々に生まれてきた頃を想定しています。

伍・いざ出発

夜になって、皆が寝静まってから、俺は式神を呼んだ。雪が帰った後、式神は、特に誰も使っていない隣の部屋に、不自然にならない程度にふすまを閉めて、隠れていてもらったのだ。満月の夜は、皆、なんだかんだと夜遅くまで起きているので、寝静まるまで時間がかかった。

俺『おい、式神』

式神『…』

俺『式神っ！』

式神『…』

呼びかけても全然返事がないので、仕方なく立ち上がってふすまを開けた。主人に世話をさせる式神なんて聞いたことがない。

俺『式神、何処だ？』

俺は、薄暗い部屋の中を見回して式神を探した。式神は、庭に面したふすまを開けて、庭がよく見える、月明かりで明るい床に横になっていた。

（無用心だなあ。誰かに見つかったらどうするんだ）

俺は式神を起こすために、近づいて顔のそばにかがみこんだ。

（なんて美しくて可愛らしい寝顔なんだ）

月の光に照らされた寝顔は、昼の明るさの中で見たよりもさらに

その美しさを増していた。あどけなさの中に、まだ幼いながらも艶やかさの萌芽が見られ、神々しいまでの完璧な美しさを持っていた。

俺は無意識のうちに、その顔をよく見ようと体を近づけていった。

(ッ！)

俺は、直感的に身の危険を感じて、体を後ろに反らした。

俺が退いた後の空間に、ワンテンポ遅れて式神が覆い被さる。

式神『あー、惜しい。もう少しで竹姫ちゃんのパーストキスだったのに』

俺『おーまーえーなー』

俺としたことが、容姿に見とれてこいつの本性を忘れていた。こいつはクソ変態式神だった。容姿に騙されてはいけない。

俺『とりあえず、さっさと服を脱げ』

式神『えー。竹姫ちゃん、意外にス・ケ・ベ…』

俺『とつとと脱げ』

式神に服を脱がせて、俺も服を脱ぐ。俺はなるべく式神の方を見ないように気をつけた。裸を見るのが恥ずかしいというのもあるが、容姿の美しさに見入ってしまった、また式神につけ入られることを警戒したためだ。

お互いの服を交換して、式神は竹姫の格好になり、俺は男装した。乙女の身だしなみとして伸ばしている髪は、立烏帽子の中にしまつて、女性の痕跡を消した。

俺『じゃあ、行ってくるから、お前は俺の身代わりとして、あそこの布団の中で寝てろ。朝までには戻る』

そう言つて、俺は足袋を履き、足駄を履いて、庭に降り立った。

庭は月明かりに照らされて青白く輝いていた。時折、雲が月を隠して辺りが闇に包まれるが、またすぐに月が顔を出して辺りに光が戻る。

（よし。行こう）

俺は意を決して屋敷の門に向かって歩き始めた。

伍・いざ出発（後書き）

転生して1ヶ月目が満月ってことは、転生して竹の中で発見された時も満月だったんですね。今、気づきました。それはともかく、平安時代の人は月を見るのが大好きみたいなので、きっと満月の夜は毎月飲み会なのでしょう。

陸・夜道に注意

屋敷の門に門番がいたのは想定外だった。どうしたものかと思案したが、月が雲に隠れてあたりが暗くなったところで、石つぶてを投げて反対側の猫を驚かし、門番がそちらを見た隙について、門をくぐり抜けた。幸い門番には気づかれなかったようだ。

（自分でやっというてなんだが、こんな簡単に通れて本当に大丈夫なのか？）

自宅のセキュリティに疑問を感じたが、その件の追及は後にして、時間を無駄にしないために俺は全力で走った。

（なんだこれは…）

俺は、走り始めてすぐに異変を感じた。まず気づいたのは、周囲の景色が流れる速度が異様に速いのだ。まるで車窓から景色を眺めているような速度で、とても推定小学1年生が走っている速度ではなかった。

（これはつまり、俺の足が車並みに速いってことか）

足の速さに気を取られて、もう1つの異常に気づくにはしばらく時間がかかった。満月の夜とはいえ、街灯もないのにもかかわらず、周囲の景色がはっきりと見えるのだ。しかも、月が雲に閉ざされても、暗くなったと感じるものの、ものの輪郭は正確に認識することができる。

もっと不思議だったのは手紙だ。道に迷わないために、手書きの

地図の描かれた手紙を持ってきたが、普通は夜の闇の中では、例え月明かりがあつたとしても手紙を読むことはできない。しかし、俺は何の苦勞もなく手紙に描かれた地図を読んで道を確認している。

（俺の体は不思議なことばかりだな）

確かに、俺の体は不思議なことだらけだ。まず成長速度が異常だ。たった10センチメートルの身長しかなかった赤ちゃんが、わずか1カ月で身長120センチメートルの推定小学1年生に成長したのだ。

さらに、あの式神が本当に俺とそっくりなら、あの美しさは尋常ではない。人間として存在できる限界の美しさを越えていると思える美しさだ。可愛いオーラで人を死なすなんて後にも先にも俺くらいだろう。

そんなことを考えていると、俺は分かれ道に出くわした。地図を見たが道は一本道だった。困ったなと思ってキョロキョロしていると、首筋にヒヤリとしたものが当てられた感触がした。

男「動くな。荷物も服も身ぐるみ置いていけば命だけは助けてやるわ」

顔を動かさずに目だけで首もとを確認すると、首筋に当てられているのはどうやら衛府太刀えふのたちと呼ばれる日本刀の一種のようだった。刃先は首筋を向いておらず、刀の背の部分が押し当てられていた。より恐怖を感じさせるために、鉄の感触がしっかりと伝わるよう、切れない側を押し当てているのだろう。

（これなら…、いけるか？）

背筋も凍るこの状況で落ち着いて状況を分析している自分の冷静さが不気味に感じたが、ここで身ぐるみ剥ぎ取られるわけにはいかない。幼いとはいえ俺は女だ。無事に解放されない可能性は男よりもはるかに高いだろう。

チャンスは一度。刃先がこちらを向いていない今を逃しては、次にいつ好機が訪れるかわからない。俺は呼吸を整えて後ろの追い剥ぎの気配を伺った。幸い、気配は後ろの男一人しか感じられない。共犯がいないなら、この男を無力化すれば完了だ。冷静に呼吸を読んで、男が息を吐ききったところで仕掛ける。

（今だ！）

首筋に押し当てられている太刀を逆に押し返すように体重を預け、太刀の動きを封じながら、そのまま太刀の背を伝うように振り向く。狙うは急所への一撃。身長差を考えれば股間が一番狙いやすいが、体を半身にしていると命中させにくい。背後を取られて男の姿勢が分からなかったので、股間を狙うのはリスクが大きかった。だから、ここでの狙いは肺。できれば心臓。息を吐ききったところへの一撃で、一瞬呼吸困難にさせ、その隙に足の速さを生かして逃げる。

大人の男が相手なら、身長120センチメートルの俺にとって、肺は頭よりも高い位置にある。車並みの速度で走る脚力があるので、助走さえあれば掌底を当てればそれで十分だろうが、残念ながら助走距離はほぼゼロだ。ならば未知数の腕力に頼るよりは、常識はズレな脚力を信じて飛び蹴りをする方が成功率が高い。俺は、刀を持つ男の手を掴んで自分の方へ引っ張り、全力で踏み切って男の胸を蹴り上げた。

陸・夜道に注意（後書き）

「俺」が駆け抜ける道は、おそらく堀川通を北に向かっているのだと思われます。基本的に上賀茂神社まで一本道ですが、途中、賀茂川を越えるところで道に迷ったと推測されます。

太刀とは刀の形状と長さによる分類です。長さは60～90センチメートルくらいです。現代、一般的な日本刀は打刀と言いますが、平安時代ではまだ打刀は登場しておらず、太刀が一般的な刀でした。衛府太刀とは太刀の拵えによる分類で、宮中や市中の警護を司る五衛府（後に六衛府）の武官が実戦用に持っていた太刀のことです。時代が下るに従って豪華な儀礼用の太刀として進化しますが、この頃はまだ実戦用に使われていた時代でした。

「俺」目線では、拵えは見えないので、正確には衛府太刀かどうかを判断することはできませんが、当時の六衛府の武官が使っている形状の太刀であるところから、「俺」の常識に照らしあわせて衛府太刀と結論づけています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8876x/>

【今は昔】転生！かぐや姫【竹取の翁ありけり】

2011年11月4日13時18分発行